

日本における川崎病既往者の死亡率：2009年末までの結果

中村好一、阿相栄子、屋代真弓、坪井聡、古城隆雄、青山泰子、小谷和彦、上原里程、柳川洋(自治医科大学公衆衛生学教室)

背景：川崎病既往者の長期予後はいまだに明らかではない。

方法：1982年7月から1992年12月の間に52の協力病院は川崎病確実例の診断を受けた全ての患者のデータを収集した。患者は2009年12月31日または死亡まで追跡された。人口動態統計をもとにした標準化死亡比(SMR)を計算した。

結果：観察された6576人のうち、46人(男35人、女11人)が死亡し、SMRは1.00(95%信頼区間[CI]:0.73-1.34)であった。急性期の高いSMRに対して、急性期以降の全対象者の死亡率は高くなかった。心後遺症を持たない群での急性期以降のSMRは0.65(95%CI:0.41-0.96)であったのに対して、観察期間中に心後遺症を持つ13人の男と1人の女が死亡し、SMRは1.86(95%CI:1.02-3.13)であった。

結論：このコホート集団では川崎病による心後遺症を持つ群の死亡率は一般集団よりも高かった。一方、心後遺症を持たない群では男女とも死亡率は上昇していなかった。

キーワード：川崎病、長期予後、死亡率、追跡、日本